

## スマトラ沖大地震と 国際語になった "Tsunami"

追手門学院大学教授 重松伸司

### 大津波襲来

昨年12月26日、現地時間の午前7時56分、インドネシアのアチェ近くで発生した震度M9.0のスマトラ沖大地震は、強大な津波を引き起こし、千kmにわたるベンガル湾を横断した。その影響域は、スマトラ島北西部、タイ南西部、ペナン島などマレーシア北西部、さらに南インド東岸一帯、スリランカ南端ゴールにいたる、ベンガル湾全域に及んだ（低地域が広がる湾北奥部のミャンマーと、バングラデシュの災害範囲・規模は不明である）。災害は死者28万人余、経済的な損失は数十億ドルと推定されている。その後再び3月28日深夜にM8.7の地震がアチェ近くのニアス島で発生し、多数の家屋倒壊と死傷者数百人の被害を出



している。  
12月26日、インド洋に大津波が波及しているころ、たまたま、私は三重県志摩半島の西南端に位置する小漁港、

相差（おうさつ）の岸壁にいた。漁を終えた小型船が数隻停泊し、波は穏やかで地元民の姿には何の異変も感じなかった。しかし、翌27日早朝、テレビの臨時ニュースは大地震の速報を伝えてきた。死者・行方不明者や被害の情報は錯綜し、状況は判然としなかった。が、映し出された映像は私を驚かせた。2か月前、私が宿泊していたペナン島ジョージタウン北端のE&Oホテル、その北庭のプール下を襲来する大波であった。



ペナン島北端、E&Oホテル

### 被災地調査に飛ぶ

その後数日の間に伝えられてきた情報を総合すると、ペナン島では60名余の死者が、インドネシア・スマトラ島の西北端アチェやタイのリゾート地プーケットでは数万の死者・行方不明者が出たという。2月に入って、ペナンの町おこし運動に取り組むNPOの主要メンバーN氏から、アチェ町並み復旧の緊急支援要請がメールで送られてきた。2月23日から数日の日程で状況調査のためペナンへ飛んだ。ペナンの被害は幸い軽微であったが、アチェの状況は、マレーシアでの情報では正確に把握できないほどであった。独立運動を続けているアチェが、これまでほとんど話題となる



震災後（上）、震災前（下）のアチェ。津波は海岸から2km内陸まで押し流したことがわかる

ことはなかったが、二度にわたる大災害で、皮肉にもアチェの名前は強く世界の人々に記憶されることになった。

さて、「津波」による人的な災害を大きくしたのは何か。ペナン博物館前で津波を経験したF氏によれば、当地での災害の要因は「tsunamiが何であるか知らずに、面白がって見物しに行き押し流された」とことだという。この言葉を裏づけるように、タイやイン

ドネシアあるいは南インド、スリランカでも、津波という現象が実際どのようなことなのか、住民はまったく知らなかったと報道されている。「津波」という現象が正確に理解されず、現象を的確に表す「ことば」がなかったらしい。

### 「津波」の経験知がない

津波情報の伝達技術や認知システムは、その後、日本の気象庁、米国の太平洋津波情報センターなどで国際的に検討されてきた。地震・津波情報の把握、情報発信、危機対応という問題は技術的には解決が図られている。だが、問題はそうした「情報」を住民の体験・経験則として、現地の人たちがどう理解するかである。tsunamiという現象についての現地の「ことば」と、「情報の経験知」が重要なのである。

わが国には、安政の南海大地震を教訓にした「稲むらの火」など、村の年配者による経験知にもとづくさまざまな民話や言い伝え、教訓が地域ごとにある。最近でも北海道や東北地方、日本海沿岸各地に起こった地震と津波は多くの教訓を残し、経験則として生かされている。それらが災害を小さくしたという効果もあったはずだ。

### 古典に描かれた「地震」

一体、インドや東南アジアでは、「津波」や「地震」という現象を示すことばや伝承はあるのだろうか。インド古典に詳しい同僚S氏は早速調べてくれた。

「人の王よ、もしも、わたくしが覺りを得た後に／このような願いが成就するならば／この(大)千世界は振動せよ／天人の群は空中から花を降らせかし」「大地は震動し、花は雨と降り／数百の楽器は空中に奏でられた／…」(大無量寿經、『浄土三部經 上』中村元他訳注、岩波文庫、41頁)。また、矢野氏らの研究『占術大集成1』(矢野道雄、杉田瑞枝訳注、平凡社東洋文庫589、1995、第32章)によれば、「地震の相」について「地震を巨大な地球の内部の水の中に住んでいる生物によって起こされる」あるいは「大地の重荷に耐えかねた巨

象(ディグガジャ)の吐息によって生ずる」「風が風によって打たれて大地に落ちながら音をたてる」と表現されている。さらに「風神(ヴァーユ)の地震」「火神(アグニ)の地震」「雷神(インドラ)の地震」「水神(ヴァルナ)の地震」の説明が続く。このような宗教古典に詳述された「地震」という事象の背景には、地球内部の地殻変動で生じた「大地鳴動」の現象や、インド聖地の山岳・氷河の崩落・地すべりといった物理的現象の経験知があったのだろう。しかし、そうした現象はもっぱら北インド内陸部の現象であり、ベンガル湾に面する南インドではどうだったか。私の留学中の1969年であったか、今回、大津波の被害を受けたチェンナイ(マドラス)のベンガル湾に面した大学寮で一度だけ震度2、3の地震を経験した。寮生は地震という現象を理解していなかった。タミル語では地震は「ブーミ(大地)ヤディラッチ(揺れ動く)」、因みに、「ブーミ」はサンスクリット語から音写されたタミル語である。地震の歴史的経験の有無にかかわらず、一応タミル語には地震という用語はあったのだった。

### 「津波」という表現がない

「津波」はどうか。タミル語で波は「アライ」だが、自然現象としての津波・大津波という用語はない。マレーシア語ではどうか。やはりサンスクリット語から借用された「大地(ブミ)」とマレー語の「揺れ動く(ゲンバ)」が複合した「ゲンバ・ブミ」が「地震」をあらわす。波は「オンバク」、「ゲロンバン」であるが、津波・大津波を意味するマレーシア語はない。これまでの長い歴史の中で、自然現象とりわけ地殻変動や火山などの災害は経験してきたが、「津波」の経験は記録になかったのではないか。「津波」が起こったとしても、それは他の現象と取り違えていたのではないか。

今般の大災害をきっかけに、「スシ、タタミ、カイゼン」といった国際化した日本語の他に、新たに世界共通の「日本語」として「Tsunami」が加わったのである。